【研究機関の紹介(5)】

帯広畜産大学原虫病研究センター

原虫病研究センターは、1990年に設立された原虫病分子免疫研究センターを基礎に、2000年4月に5研究分野からなる全国共同利用施設として新設された。更に、2003年には学内施設である「大動物特殊疾病研究センター」の3研究分野も原虫病研究センターに整備された。現在、教員、研究員、大学院・学部学生、ＪＩＣＡ「上級原虫

原虫病研究センター

マダニとマダニ媒介性疾病に関するシンポジウム

的標準法を目指している。先端予防治療学分野（杉本千尋教授、井上昇助教授）では、比較ゲノム解析あるいはタンパク質機能解析からのアプローチにより、ワクチンや治療薬の標的となる機能分子を探索、新たな原虫病予防治療の手段開発に応用している。

また、ＢＳＥ、鳥インフルエンザ、食中毒事件の発生、食糧の半分以上を海外からの輸入に依存しているなど、食物の安全と安心の確保が国民の極めて大きな関心事となっている。そこで、特定疾病分野（今井邦俊教授、小川晴子助教授）では、フラビウィルス感染やＢＳＥなどの発生機構や病態形成の機序を解明し、的確かつ迅速な診断・予防法の確立を目指している。食品有害微生物分野（牧野壮一教授、川本恵子助教授）では、細菌性感染症における病原体の検出とそれらによる危害阻止のための技術やシステムの開発、薬剤抵抗性・感受性の評価手法の開発、内因性及び外来性物質の安全性評価手法の開発等の研究を行っている。大動物巡回臨床分野（大星健治教授、山岸則夫助教授）では、生産病の予防対策、乳房炎や蹄病などの感染性疾患、畜舎衛生の改善などに関する研究を進めている。

原虫病研究センターは人材育成、国際協力にも努めている。平成７年より、ＪＩＣＡによる「上級原虫病研究コース」を開講している。本コースでは、毎年10名の研修員を開発途上国から招へいし、原虫病研究の最新知識の習得と先端技術分野での共同研究を通じて、自国の原虫病対策の中心的役割を果たす専門研究者を養成している。また、留学生の受け入れ、国際シンポジウムの開催、海外の大学や研究所との連携により、国際的な研究連携ネットワークの形成も積極的に進めている。原虫病研究センターの研究内容、活動に興味のある方はホームページ（http : //www.obihiro.ac.jp/~protozoa）をご覧下さい。

（文責　五十嵐郁男）